みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

5．広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009839

5 広報・社会連携

概観

地域に根ざした広報活動

大型複合施設エキスポシティ内にある吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で１カ月間（2020年９月２日～９月30日）、「みんぱくフェア」を開催した。トーテムポールにまつわる大型解説パネルを作成し設置するなど、地域住民を中心に研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数 11,210名）。

北大阪８市３町の美術館・博物館計57館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」によるシンポジウム、「大阪でEXPOを考えるⅢ――大阪万博50年」に協力し、会場を提供した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2020に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の中心的役割を担い、広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するとともに、広報、普及するため、本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズ作品の上映会を大阪市内にあるミニシアター「淀川文化創造館シアターセブン」において、無観客でオンライン開催するとともに、監修者による解説を行った。４回の実施で延べ365名のオンライン参加があり、本館の活動を広報することができた。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を促した。本年度は、継続加入６校（大阪大学、同志社大学（文化情報学部・文化情報学研究科、グローバル地域文化学部）、千里金蘭大学、立命館大学、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校）、京都大学）の申込があり、計1,644名の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに継続して掲載するとともに、活用方法を紹介したリーフレットを本年度も作成し、全国の大学に配布した。また、本館を使用した大学教員による講義・講習も33件実施され、468名の学生等に展示場が利用された。

学校教員向けに、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどについて紹介する動画を製作し、2020年３月に本館公式YouTubeチャンネルで公開した。併せて、主に関西圏の小、中、高等学校及び教育委員会、支援学校に紹介動画を本館公式YouTubeチャンネルで公開したことを案内した。

その他、若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的に学校団体（大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続した。

なお、例年、初等中等教育に貢献するため実施している職場体験及び小学校団体の博物館見学を有意義で楽しいものにし、体験を通じて多文化共生を学ぶきっかけをつくることを目的とした、展示場における体験プログラム「わくわく体験 in みんぱく」は、コロナ禍の影響により、実施することができなかった。一方、コロナ禍による家庭学習の機会の需要増及び学校休業対策として、本館が制作した子ども向けのコンテンツをまとめた「おうちでみんぱく」を本館ホームページで公開し、39,231件のアクセスがあった。

インターネットによる広報活動

ウェブサイト上のニュースや、催し物のコンテンツで最新の情報を発信したほか、特別展や企画展は個別サイトを作成し関連イベントを中心とした情報発信を行った。また、2021年２月にウェブサイトを「使いやすく、見やすく、わかりやすいホームページ」をコンセプトに、ビジュアルを中心に、長すぎず、簡潔なページへとリニューアルを行った。ホームページの利用者数は、訪問者数1,041,104、ページビュー数2,718,942であった。

メールマガジン（みんぱくe-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月１回継続して発信した（配信数は53,855件）。

ソーシャルメディアに関しては、利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数16,086（年度）、Twitterフォロワー数4,551（年度）、YouTube総再生回数35,084（年度）、Instagram いいね！数6,521（累計））。また、YouTubeのライブ配信機能を用い、ゼミナールや研究公演、公開講演会などの中継を行った。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載を継続し、本館の研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、週刊新潮でコラムニストがみんぱくの収蔵品を紹介する、「ディープ『みんぱく』探検隊」が継続して連載されている（2019年12月～）。千里ニュータウンFM放送番

組「ごきげん千里837（やぁ、みんな）」の「みんなのみんぱく」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間24本）。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年10回（参加者数 156名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。

また、報道関係者との懇談会については、オンラインを併用しながら開催したことにより、今まで参加することができなかった在京メディアの参加もあった。

2020年度は、テレビ59件、ラジオ25件、新聞480件、雑誌110件、ミニコミ誌38件、その他63件の各媒体総数777件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を５回（参加者数 572名）開催したほか、オンライン（無観客）でも１回開催した。また、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう」を16回実施した（参加者数 552名）。みんぱくゼミナールにおいては生涯学習の促進のために10回参加毎に表彰を行っており、今年度は25名を表彰した。

さらに、映画の上映に研究者の解説を加えた「みんぱく映画会」を３回（参加者数 397名）開催したほか、オンライン（無観客）でも４回開催した。この他、特別展「復興を支える地域の文化」関連として、2021年３月６日に研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」をオンライン開催し、延べ1,943回再生された。

以上、コロナ禍のため、対面での開催が制限された一方、新しい試みとして、活動の一部をオンラインで開催した。

また、特別展「先住民の宝」関連として、カナダ先住民の文化への親しみ、理解を深めることを目的としたワークショップ「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」（10月31日～11月１日、延べ参加者数29名）、アイヌの自然に対する考え方や伝統の継承について理解を深めることを目的としたワークショップ「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」（11月７日～８日、延べ参加者数43名）を開催した。

このように、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなどのイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付するとともに、全国の研究機関、大学等に寄贈することによって、広く情報発信を行った。視覚障害者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

なお、例年実施している「音楽の祭日 in みんぱく」、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的として行う祈りの儀式「カムイノミ儀礼」については、コロナ禍のため実施することができなかった。

その他の活動

学校を卒業した知的障害者に対し、博物館を開かれた学びの場として提供するため「みんぱくSama-Sama塾」の試行を2018年度、2019年度に引き続き行った。本年度はワークショップを３回実施し、延べ41名の参加があった。ワークショップ当日の様子を基に知的障害者が博物館を活用する際に必要とされることや改善点などを探った。

また、高齢者や身体が不自由な方など幅広い層が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

さらに、2019度に制作した本館紹介ビデオをホームページで公開するとともに、大阪モノレールの車内広告において、本館展示及び特別展示の広報を行った。

国立民族学博物館要覧2020

- 和文要覧　　2020年８月発行
- 英文要覧　　2021年２月発行

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　（2021年３月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

2020年度は、「使いやすく、見やすく、わかりやすいホームページ」をコンセプトにビジュアルを中心に、文章量を抑え、アクセスしやすい構成へと全面的な改修を行った。また、改修にともない、レスポンシブWEBデザインを導入し、近年アクセスが増加しているスマートフォンやタブレット端末からの閲覧に対応したサイトを構築することにより、使いやすさが向上した。なお、作成においては最新のソフトを導入し、ホームページ全体のセキュリティも向上した。

提供している主な情報は以下の通り。2020年度の訪問件数は1,041,104件。

- **研究活動**
  研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

- **博物館展示・事業活動**
  本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

- **大学院教育**
  総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

- **データベース**
  本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月１回電子メールで配信している。2020年度の配信数は53,855件。

報道

●報道関係者との懇談会

2020年６月18日	24名（19社）	国立民族学博物館の再開にあたって、トーテムポールの立ち上げについて、新任紹介
６月24日	13名（11社）	トーテムポール立ち上げ
７月16日	16名（12社）	国立民族学博物館の再開後の動きについて、最新の研究紹介（刊行物紹介）、リニューアルしたみんぱく電子ガイド、ビデオテークについて
９月30日	14名（12社）	特別展「先住民の宝」報道・出版関係者向け内覧会のご案内
10月15日	11名（７社）	「第35回大同生命地域研究奨励賞」受賞について、最新の研究紹介（刊行物紹介）、共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」
11月19日	12名（９社）	最新の研究紹介（刊行物紹介）、『ガラン版千一夜物語』最終刊発行及びみんぱく公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」の報告、特別展「先住民の宝」アイヌについて
12月17日	12名（10社）	みんぱく映画会／みんぱく映像民族誌シアターについて、最新の研究紹介（刊行物紹介）、研究の窓（第10回地域研究コンソーシアム賞の受賞と研究報告）、共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」の報告

2021年１月21日	21名（17社）	公開講演会「グローバル化する武道と中東」、最新の研究紹介（刊行物紹介）、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」
２月18日	13名（10社）	特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連イベント、連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ集合的健忘に抗するための文化伝達」、最新の研究紹介（刊行物紹介）
３月３日	20名（15社）	特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」報道・出版関係者向け内覧会

●新聞等報道件数

2020年度は、テレビ59件、ラジオ25件、新聞480件、雑誌110件、ミニコミ38件、他63件、計777件の報道があった。

月刊みんぱく

４月号	（第511号）	2020年４月１日発行	特集「知的生産のフロンティア」
５月号	（第512号）	2020年５月１日発行	特集「釣り」
６月号	（第513号）	2020年６月１日発行	特集「食と博物館展示」
７月号	（第514号）	2020年７月１日発行	特集「拡がる写真データベース」
８月号	（第515号）	2020年８月１日発行	特集「ヒトと感染症」
９月号	（第516号）	2020年９月１日発行	特集「ウポポイでアイヌ文化を魅せる」
10月号	（第517号）	2020年10月１日発行	特集「世界の地相術」
11月号	（第518号）	2020年11月１日発行	特集「世界温泉めぐり」
12月号	（第519号	2020年12月１日発行	特集「激変する世界と観光の現在」
１月号	（第520号）	2021年１月１日発行	特集「めでたい場の食」
２月号	（第521号）	2021年２月１日発行	特集「逆転の雪」
３月号	（第522号）	2021年３月１日発行	特集「地域の記憶と向き合う」

みんぱくゼミナール

第501回　出稼ぎ先は「小さな国連」――国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち

2020年８月15日

講　師　奈良雅史

受講者　62名

内　容　中国内外から多くのムスリムが集まる「世界最大の卸売市場」といわれる浙江省義烏市。そこに暮らすさまざまな出自を持つムスリムたちがどのようなコミュニティを築いてきたのかを考えた。

第502回　梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術

【棹忠夫生誕100年記念企画展関連】

2020年９月19日

講　師　小長谷有紀（国立民族学博物館 客員教授）
高野明彦（国立情報学研究所 教授）
飯田　卓

受講者　158名

内　容　梅棹忠雄は、調査で得た資料を整理して論文にするだけでなく、関連資料をアーカイブスとしてのこしている。資料の収集から公開までの研究サイクルを、新技術も用いて実現するようすを話した。

第503回　アイヌ文学の世界――韓・日との比較

【特別展「先住民の宝」関連】

2020年10月17日

講　師　北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授）
　　齋藤玲子
受講者　146名
内　容　アイヌ民族が伝承してきた物語は、登場するキャラクターや語り方などによっていくつかのジャンルに分けられてきた。朝鮮半島や日本の物語と比較し、共通点や違いについて考えた。

第504回　ミュージアムが社会を変える――水俣の遺産
2020年11月21日
講　師　平井京之介
受講者　82名
内　容　博物館や資料館はただモノを保管するだけではない。現在、その社会を変える力が注目されている。熊本県水俣市の資料館を事例に、負の遺産がどのように利用されているかを話した。

第505回　民博研究の政策としての応用――トランスフォーマティブ研究事始め
2020年12月19日
講　師　出口正之
受講者　55名
内　容　みんぱくの展示品を見て皆さんは何を感じるか？ もし、従来の「常識」が覆されたなら、それがすべての「研究」の始まりだ。民博の研究が税制、NPO 政策、大阪の活性化政策などに活かされている。「常識の残像」から脱するために民博がいかに役立っているかを話した。

第506回　南半球の華僑華人――客家を中心として
2021年２月20日（オンライン（ライブ配信）のみで実施）
講　師　河合洋尚
受講者　67名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　21世紀に突入後、南半球では華僑華人の移住が急増している。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、ペルーをとりあげ、中国系新移民の流入による社会・文化構造の変化を解説した。

第507回　牡鹿半島の民俗誌――復興キュレーション
【特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連】
2021年３月20日（会場・オンライン（ライブ配信）併用開催）
講　師　加藤幸治（武蔵野美術大学 教授）
　　日髙真吾
受講者　69名（来館による参加者数）
　　55名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　震災から10年間の民俗調査と博物館活動。自然の営み・復興の繰り返しの歴史・家族や隣人の思い出、三つの時間から描き出す牡鹿半島の民俗誌。「津波」「クジラ」そして「ペンギン」をキーワードに話した。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

延期　2020年４月５日　サーミの工芸品
　　（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　庄司博史

延期　2020年４月12日　ネパールの先住民運動
　　（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　南 真木人

延期　2020年４月19日　台湾原住民運動40年――「高山青」から移行期正義まで
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　野林厚志

延期　2020年４月26日　アフリカの先住民について
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　池谷和信

延期　2020年５月３日　カナダ北西海岸先住民文化の歴史と現状
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　岸上伸啓

延期　2020年５月10日　100年前のアイヌのくらしと現代の文化
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　齋藤玲子

延期　2020年５月24日　オラン・アスリと精霊
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　信田敏宏

延期　2020年５月31日　デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　丸川雄三

延期　2020年６月14日　現代に活かす「知的生産の技術」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　飯田　卓

中止　2020年６月28日　1990年代黒タイの村落生活――みんぱくのデータベース「ベトナムの衣文化」の写真から
（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。）
講　師　樫永真佐夫

第567回　2020年７月12日　アマゾンのゴムブーム
講　師　齋藤　晃
受講者　18名
内　容　アマゾンでは、ヨーロッパとの接触以前から、天然ゴムを素材とする品がつくられてきた。しかし、19世紀に加工技術が向上し、利用範囲が広がると、ゴム採取は巨大産業に変貌し、アマゾンを大きく変えた。ゴムの利用法を説明するとともに、その歴史を振り返った。

中止　2020年７月26日　カフィル・カラ遺跡（ウズベキスタン）の発掘調査
（本館への爆破予告による臨時休館のため中止。）
講　師　寺村裕史

第568回　2020年８月９日　中国におけるハラールフード
講　師　奈良雅史
受講者　21名
内　容　中国には2000万人ほどのムスリム（イスラーム教徒）が暮らしているとされる。かれらは漢族をはじめとする非ムスリムとの関係のなかでどのような食文化を紡いできたのだろうか。かれらを取り巻く現代的状況を踏まえ、中国に暮らすムスリムの食のあり方を考えた。

第569回　2020年８月23日　オンライン展示の条件――民族誌資料、著作権、公開適正化
講　師　伊藤敦規
受講者　12名
内　容　新型コロナの影響で世界中の多くの博物館が展示場を閉鎖した。そこで注目されたのがインターネットを利用したバーチャルな展示場訪問と資料紹介である。収蔵資料のオンライン公開に際して、資料の所有者である博物館がクリアしなければならない著作権上の課題を解説した。

第570回　2020年８月30日　コーヒーと西アジア、そして日本
講　師　菅瀬晶子
受講者　40名
内　容　今年２月、西アジア展示内に新セクション「グローバル文化としてのコーヒー」が誕生した。この新セクションの展示内容をもとに、西アジアにおけるコーヒー文化、そして日本におけるコーヒー文化について話した。

第571回　2020年９月13日　デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」
講　師　丸川雄三
受講者　43名
内　容　フィールドノートやスケッチ、写真など、みんぱくでは梅棹忠夫が残した膨大な資料を整理しデジタル化を進めている。コンピュータで検索、閲覧が可能となったアーカイブズ資料は何を語り、そこから何がみえてくるのだろうか。その一端を探った。

第572回　2020年９月27日　現代に活かす「知的生産の技術」
講　師　飯田　卓
受講者　41名
内　容　梅棹忠夫の『知的生産の技術』が刊行されて今年で51年。その間、事務機器の発達とパソコンの普及、デジタル化の進展とインターネットの導入など数々の変化があった。なぜ、梅棹の本はいまだに読みつがれているのだろうか。知的生産の過去と現在を紹介し、未来を見とおした。

第573回　2020年10月４日　カナダ北西海岸先住民文化の歴史と現状
講　師　岸上伸啓
受講者　38名
内　容　ヨーロッパ人が到来する以前からカナダの太平洋沿岸地域に住んでいる人びとは、北西海岸先住民と呼ばれている。昔からポトラッチ儀礼や、木製のトーテムポールや仮面などを作ることで有名である。彼らの文化の歴史と現状をスライド画像を用いて紹介した。

第574回　2020年10月11日　ネパールの先住民運動
講　師　南 真木人
受講者　28名
内　容　ネパールの先住民（アーディバーシー）とは誰のことで、何を求めてどのような運動をしているのだろうか。1990年代に始まった運動の経緯と過程をふまえつつ、2008年の王制廃止後、連邦民主共和国となってからの先住民の動向を考えた。

第575回　2020年10月18日　オラン・アスリと精霊
講　師　信田敏宏
受講者　44名
内　容　特別展「先住民の宝」では、マレーシアの先住民オラン・アスリの彫像や仮面が展示されている。これらの彫像や仮面には、それぞれ精霊の名前がついている。オラン・アスリと精霊について詳しく解説した。

第576回　2020年10月25日　旅と映画とマヤ民族
講　師　鈴木　紀
受講者　42名
内　容　特別展「先住民の宝」では、グアテマラのマヤ民族を取り上げている。マヤ民族とはどのような人々なのか、「旅」と「映画」を手掛かりに考えた。話者が1983年と2019年に行ったグアテマラへの旅を比較し、その間に何が生じたのかを「映画」から読み取った。

第577回　2020年11月１日　100年前のアイヌのくらしと現代の文化
講　師　齋藤玲子
受講者　42名
内　容　特別展で原画を展示する漫画『ゴールデンカムイ』は、北海道と樺太（サハリン）を舞台にした冒険活劇で、そこに描かれるアイヌのくらしはおよそ100年前のものである。明治から現代に至るまでの歴史と、生活が変化するなかでも受け継がれてきた文化について紹介した。

第578回　2020年11月８日　サーミの工芸品
講　師　庄司博史
受講者　42名
内　容　サーミ人にとって、サーミ工芸は今日も生活をささえる、伝統文化をいかした重要な生業である。生活の近代化によりかつての工芸品の多くは便利は製品におきかわり、サーミの工芸品をまねた安価な製品も出回るなかで、彼らの工芸品をまもる努力を紹介した。

第579回　2020年11月29日　アフリカの先住民について
講　師　池谷和信
受講者　42名
内　容　アフリカ大陸には、多様な民族集団が暮らしている。その領域は、国境と一致することはあまりない。はたして先住民は、アフリカに存在するのだろうか。ここでは、アフリカの先史時代から現在までの民族の歴史をふまえて、誰がアフリカの先住民であるのかという問いを設定して考えた。具体的には、カラハリ砂漠のサン人やソマリランドのソマリ人の事例を紹介した。

第580回　2020年12月６日　台湾原住民運動40年――「高山青」から移行期正義まで
講　師　野林厚志
受講者　42名
内　容　台湾には原住民族とよばれるオーストロネシア系先住民がくらしてきた。原住民族は1980年代から先住民族としての権利と尊厳を主張し、現在では台湾の憲法において先住民族としての存在が認められている。その40年にわたる誇りをかけた営みを話した。

中止　2021年１月24日　北マケドニア共和国という国
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）
講　師　卯田宗平

中止　2021年１月30日　新みんぱく映像民族誌紹介「セネガルを越える人と地域ラジオ」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）
講　師　三島禎子

中止　2021年２月14日　海を越えたサピエンスとオセアニアへの移住――発掘の最前線
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）
講　師　小野林太郎

中止　2021年２月28日　ろう者と聴者の協働する「ろう通訳」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）

講　師　飯泉菜穂子

第581回　2021年３月14日　今日からは話せない！ ブルシャスキー語門前講座
講　師　吉岡　乾
受講者　33名
内　容　語学教材や講座は、「今日から話せる」などと銘打ちがちだが、たった１時間程度の勉強で話せるとは、普通に考えれば言えたものではない。今回は、魔法みたいに話せるようにはならない、ブルシャスキー語講座の初回であった。

第582回　2021年３月28日　ハワイの華人と客家
講　師　河合洋尚
受講者　24名
内　容　ハワイには日系人だけなく、中国系の華人が多く住んでいる。彼らのなかには、現地で生まれ、中国系の言語を話せない人が少なくない。では、彼らはどのようにして中国人アイデンティティを保ち、中国由来の文化を継承しているのだろうか。華人の一派である客家を中心に考えた。

研究公演

特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連
「阪神虎舞みんぱく公演」（オンライン（ライブ配信）のみで実施）
2021年３月６日
司　会　寺村裕史
解　説　橋本裕之（大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員・坐摩神社権禰宜）
中川　眞（大阪市立大学都市研究プラザ 特任教授）
山本和馬（阪神虎舞）
金崎　亘（大槌城山虎舞）
笹山政幸（被災文化遺産所在調査専門調査委員）
コーディネーター　日髙真吾
出　演　阪神虎舞
参加者　131名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」の関連企画として、東日本大震災の被災地の芸能を他の地域に広め、災害の風化を食い止めることを１つの目的として神戸で結成された「阪神虎舞」を招き、災害の記憶への向き合い方について参加者とともに考えた。

みんぱく映画会

【みんぱく映画会】
2020年10月10日
「斧は忘れても、木は覚えている」
司　会　信田敏宏
登壇者　盛田　茂（東洋大学アジア文化研究所 客員研究員）
参加者　125名
内　容　特別展「先住民の宝」の関連イベントとして企画した。本作は、マレーシアの先住民オラン・アスリの現状や、マレーシアがブミプトラ政策を採用する大きな要因となった「人種暴動」（1969年）に関するドキュメンタリー映画で、森林破壊に直面するオラン・アスリの悲惨な状況や、マイノリティであるオラン・アスリや華人を取り巻くマレーシアの歴史を、関係者のインタビューなどを交えながら紹介した。

【みんぱくワールドシネマ　映像から考える＜人類の未来＞】
＜人類の未来＞をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施した。
（全３回のうち１回は、新型コロナウイルスによる感染症拡大防止のため中止。）

2020年９月12日
「判決、ふたつの希望」
司会・解説　菅瀬晶子
参加者　129名
内　容　ベイルートを舞台にしたレバノン・フランス合作映画「判決、ふたつの希望」を上映し、異なる価値観をもつ人びとがどのように共存していくことができるかについて考えた。

2020年11月７日
「僕の帰る場所 Passage of Life」
司　会　菅瀬晶子
解　説　田村克己
参加者　143名
内　容　ある在日ミャンマー人一家を描いた日本・ミャンマー合作映画「僕の帰る場所」を上映し、異なる土地で暮らす移民、難民について考えた。

【みんぱく映像民族誌シアター】
本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者による解説をおこなった。新型コロナウイルスによる感染症拡大防止のため、４回全ての会場参加を中止し、オンライン（ライブ配信）のみで開催。
2021年１月23日
セネガルを超える人と地域ラジオ
司　会　福岡正太
解　説　三島禎子
参加者　59名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年１月30日
ネパールのサーランギ音楽
司　会　福岡正太
解　説　南 真木人
参加者　81名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年２月13日
常ならざる音――耳を通して異界とつながる
司　会　福岡正太
解　説　山中由里子
参加者　133名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年２月27日
カンボジア クメール人の伝統芸能
司　会　福岡正太
解　説　福富友子（東京外国語大学 非常勤講師）
　　寺田吉孝（国立民族学博物館名誉教授）
参加者　92名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

博物館社会連携

●学習キット「みんぱっく」
学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。みんぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2021年３月現在で16種類28パックを用意している。

名称	個数	2020年度貸出件数	2020年度利用者数
極北を生きる	2	7	1,482
アンデスの玉手箱	2	12	2,006
ジャワ島の装い	1	6	533
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	4	429
ソウルスタイル	2	9	1,322
ソウルのこども時間	2	13	2,302
インドのサリーとクルター	2	8	470
ブリコラージュ	3	0	0
アラビアンナイトの世界	2	6	1,034
アイヌ文化にであう	2	13	1,869
モンゴル	2	19	2,043
あるく、ウメサオタダオ展	1	3	1,258
世界のムスリムのくらし１	2	8	733
世界のムスリムのくらし２	2	10	1,120
エチオピアのコーヒーセレモニー	1	3	130
エチオピアをまとう	1	6	543
		合計　127	17,274

●ワークショップ

特別展「先住民の宝」関連ワークショップ「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」

開催日：2020年10月31日（土）
　　11月１日（日）
講　師：田主　誠（版画・造形作家）
　　岸上伸啓
参加人数：10月31日　18名
　　11月１日　20名

特別展「先住民の宝」に関連したワークショップ。本館前に設置された２本のトーテムポールの観察および講師による講義により、トーテムポールに彫られる動物の特徴を学んだうえで、参加者がオリジナルのトーテムポールを制作した。

特別展「先住民の宝」関連ワークショップ「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」

開催日：2020年11月７日（土）
　　11月８日（日）
講　師：岡田恵介（公益財団法人アイヌ民族文化財団職員）
　　山道陽輪（公益財団法人アイヌ民族文化財団職員）
　　齋藤玲子
参加者：11月７日　21名
　　11月８日　22名

特別展「先住民の宝」関連ワークショップに関連したワークショップ。特別展観覧、およびアイヌの狩猟文化に関する講義の後、公益財団法人アイヌ民族文化財団の職員の指導のもと、参加者が矢を製作し、実際に弓矢をつかう体験をした。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんぱく見どころアラカルト」など、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。

2020年度は、「社会連携事業検討ワーキング」において開発中のアクティビティ型のワークシートの学校団体向けの試行を行い、結果を基に引き続き開発を継続した。来年度も引き続き開発改良と試行を行い、完成させる。

●社会連携事業検討ワーキング

本館の博物館社会連携活動を強化するため、博物館活動に関する専門的知識を有する特任専門職員を配置し、2018年度新たに配置された人文知コミュニケーター及び社会連携担当の機関研究員をメンバーに加えた「社会連携事業検討ワーキング」を立ち上げ、活動を強化するための体制を整備している。今年度はアクティビティ型ワークシートの充実に向けた調査・開発を行ったほか、近隣公共施設との連携事業として吹田市立山田駅前図書館と展示やワークショップを共同企画した。また、大阪大学との連携協定に基づき、日本と世界の民族文化の多様性と共通性を学び、文化の展示と表象をめぐる諸問題について考える機会を提供することを目的として、大阪大学の全学生を対象に昨年度おこなったスタディ・ツアーのプログラム内容を検証・改善した。

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習　事前見学＆ガイダンス

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを、毎年春と秋に実施している。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、教員が来館するガイダンスの実施が困難であることから、対面実施を見送り、その代替として学校・教育関係者向けの広報用動画を制作した。動画は、本館のホームページで公開している。

●職場体験

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供している。2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止にともなう臨時休校措置により、中学校におけるカリキュラムの見直しが予想されたため、受け入れを予定していた吹田市・豊中市・箕面市・茨木市・摂津市の教育委員会及び各市内の中学校を対象に、職場体験活動の実施の有無について事前調査を行った。その結果、全校で実施の予定はないとの回答であったため、中止とすることとした。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2020」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年９月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2020年度は、新型コロナウイルスの感染防止対策を講じた上で、総勢170名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会（３回）、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」（１回）を行った。さらに、新規メンバーに対しては、活動にあたり必要な知識を得るための研修（全５回）を実施し、そのうち１回は外部講師を招いている。以上の支援により、MMPは本年度、展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を１回（案内数17名）、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ（「点字体験ワークショップ」２回、「陽気な墓」で想い出を残そうワークショップ１回）を実施した。また、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」のデータベースコーナーにおいては、650名を超える観覧者のサポートをした。